

## チマルパインと「クリオーリョ」

篠原 愛人

### 【要約】

「クリオーリョ」という語は黒人奴隷の子孫のうち欧米で生まれ育った者を指す差別語であったが、16世紀末から植民地生まれのスペイン人にも適用され始めた。当初は主に教会関連分野で使われたが、それは急増するクリオーリョの修道士志願者に対する危機感の表れに他ならなかった。

チマルパインが『日記』で「クリオーリョ」を使うようになったのは1608年から、つまり「史的回顧」を書く前年である。それは決して偶然ではなかった。

チマルパインは立身出世を遂げたクリオーリョだけを取り上げ、「クリオーリョ」について回ったネガティブな評価を払拭し、世俗界にも適用して使用範囲を広げた。そこにはクリオーリョへのシンパシーが感じられる。また、「アメリカ生まれのスペイン人は先住民と同等」とガチュピンたちが下す評価への反論でもある。ただし、黒人のクリオーリョに対してはそのような共感はなく、メスティソに対する評価はまだ下しかねていた。

クリオーリョとガチュピンの対立は19世紀初めのメキシコ独立の一因ともなり、その萌芽は17世紀半ばにはクリオーリョ知識人の間に見られる。いわゆるクリオーリョ愛国心がそれで、その形成と成長にはグアダルーペの聖母信仰が関わっている。先住民のチマルパインがその愛国心の先駆けとまでは言えないが、彼の「クリオーリョ」はその種子だったのかもしれない。

## はじめに

メキシコ先住民チマルパイン（1579～1630 年以降?）は『歴史報告書』（第一から第八報告書まであり、以下、『第一』などと略記）や『日記』として知られる同時代史など、数々の歴史作品を執筆したことで知られる。1577 年から 1615 年までを扱った『日記』の 1608 年の記事の最後に、前後と脈絡なく突如「史的回顧」が始まる。天地創造から当時（1609 年）までの先住民の歴史を扱った簡易年表のようなものであるが、チマルパインは何のために、なぜその段階で「史的回顧」を書いたのか。その問いに答えるため、前号<sup>(\*)</sup>では「史的回顧」について予備的な分析を行ない、次のような特徴を指摘した。

- 1) 聖書による天地創造から書き始められ、キリスト教的普遍史に則った枠組みである。
- 2) メキシコ先住民の祖先が東方から船で渡って来た可能性を示唆している。
- 3) 先住民の起源について、当時流布していたユダヤ人末裔説を否定している。

これはチマルパインの他の著作の特徴とも共通している。また、前号では「史的回顧」の記事を分析して、それが 1609 年に書かれたこと、さらに自著『第七』とテソソモクの『クロニカ・メシカヨトル』を参照したと思われることを指摘した。

さて本号では、「史的回顧」の執筆目的に迫るため、「史的回顧」を境に『日記』の記述に見られる変化を分析し、変化の意味を明らかにしていく。1608/09 年の前後で大きな変化は 2 つ見られるが、本稿で扱うのはその 1 つ「クリオーリョ criollo」、つまりアメリカ大陸で生まれ育ったスペイン人の登場である。もちろんクリオーリョは征服後まもなく誕生し<sup>(1)</sup>、その後も数は増え続けていたが、ここではチマルパインの『日記』における「クリオーリョ」という単語の登場をいう。この語は 1608 年以降、つまり「史的回顧」が執筆される直前に現われ始める。なぜその時から使われ始めたのか。時代背景を紹介しつつ、チマルパインがクリオーリョに対して抱いた思いに迫っていきたい。

## §1. 「クリオーリョ」の登場

### §1-1 蔑称としての「クリオーリョ」

本来「クリオーリョ」は、ポルトガル語あるいはスペイン語の“criar”「育てる」から派生し、黒人奴隷の中でもアフリカから直接連れて来られた人々ではなく、スペインやアメリカ大陸で生まれ育った彼らの子供、いわば奴隷の二世以降を指し、さらには原産地とは異なる環境で生育した動植物種にも適用された。『16 世紀イスパノ

『アメリカ語彙集』は大西洋の対岸で使われるようになったスペイン語の新たな用例を集めているが、そこにも「クリオーリョ」の項目がある。1568～99 年の文献から採取された 11 の用例のうち、9 例は黒人奴隷、1 例は家畜を指しており<sup>(2)</sup>、軽蔑を含意したことは明らかである。

したがって、奴隷や家畜に適用された「クリオーリョ」を植民地生まれの同胞に対して用いるには、躊躇いを感じるスペイン人も多かったに違いない。そういうことをするとすれば、周りにクリオーリョがいない環境にいた非クリオーリョだったことも想像できよう。じっさい、植民地生まれのスペイン人に「クリオーリョ」を適用したおそらく最初の例の 1 つは、フワン・ロペス・デ・ベラスコ（1530/40?～98 年）の論考に見られる。1571 年に設置された王室付き地歴官 *Cosmógrafo-cronista Real* を務めた彼は、本国にしながら植民地の各地から情報を取り寄せ、それを基に『インディアス地誌報告』（1574 年）を執筆した。

あちら（インディアス）に渡り、長年そこで暮す人たちは、風土が違  
うせいで人柄や風貌まで何かと違ってきてしまう。しかし、そこで生ま  
れる人たちはクリオーリョと呼ばれ、どこから見てもスペイン人と思わ  
れ、そう見なされているが、肌の色も体格もまったく違うことは周知の  
通りである。みな大柄で、肌の色は土地のせいでやや品位に欠ける<sup>(3)</sup>。

この直後、ロペス・デ・ベラスコはクリオーリョが外見だけでなく、内面も退化する  
と言いつつ。このように、アメリカ生まれのスペイン人に対する蔑みは初期から根  
強く存在していた。フランシスコ会のヘロニモ・デ・メンディエタ（1525～1604 年）  
は 1562 年に次のように言っている。

当地で生まれた人（los acá nacidos）の中には善良で、有徳だった子  
もいたかもしれないが、最終的にはそのほとんどがインディオと同じよ  
うな習性と慣習を身につけてしまう。同じような風土に生まれ、インデ  
ィオの中に交じって育ったからである<sup>(4)</sup>。

その 12 年後もメンディエタのクリオーリョ評価に違いは見られない。スペインで  
は十代半ばで修道会に入って研鑽を積むが、メキシコではクリオーリョは 24 歳まで、  
また本国生まれの者も 20 歳まで入会を認めるべきでないと提言している<sup>(5)</sup>。修道士  
として適任かどうかを見極めるのに、クリオーリョの場合はもっと時間が必要だ、と  
いうのである。

確かに植民地生まれのスペイン人に対して厳しい評価を下しているが、メンディエ  
タは「クリオーリョ」という言葉を避けている。やはりフランシスコ会士で、彼より  
もメキシコでの布教経験が豊富なベルナルディーノ・デ・サアグン（1500～90 年）

も 1577 年頃、やはり「クリオーリョ」を使わずに、似たような発言をしている。

当地に住むスペイン人も、そしてこの国で生まれたスペイン人ならなおさら、(先住民と) 同様の悪い性向を身につけてしまう[...]. ここで生まれたスペイン人はいかにもインディオそのもので、見かけはスペイン人のようでも性質は違う。本国生まれのスペイン人でもよほど気を付けないと、この土地に来てほんの数年で全く人が変わってしまう。思うに、これは当地の風土あるいは星座のせいである<sup>(6)</sup>。

当然、クリオーリョも自分たちを指すときに「クリオーリョ」を使うことはない。メキシコの征服と植民地時代初期の歴史を描いたクリオーリョ、フワン・スアレス・デ・ペラルタ (1535?~90?年) の著作にも「クリオーリョ」は出てこない。

…キリスト教徒 (スペイン人) がこの町 (メキシコ市) を所有して以来、またインディオらとごく親しく交流するようになって何年も経つのにそれ (財宝) が見つからないなどということはあるだろうか。とりわけメキシコで生まれた者 (los nacidos en México) をインディオは我が子のように思い、インディオの女性たちはその多くを (乳母として) 自分の母乳で育ててきたのに、その子たちに何も明かさないということがあるだろうか<sup>(7)</sup>。

経済的に苦しい生活を強いられていたクリオーリョの気持ちを代弁したバルタサル・ドランテス・デ・カランサ (1547?~1613 年以前) は、1604 年の著作で「征服者や初期入植者の子孫」という言い方に徹している。

…インディアスの王国に定住するスペイン人が日増しに増えていったが、そこで生まれた人、つまりその地の征服者や、そこが発見・征服・入植された当初から住んでいた人たちの子孫もいれば、発見され、征服されて年日が経つうちにやってきて、その土地に馴染んでいき、根を張り、家系・一族・子孫を増やした人もいる…<sup>(8)</sup>

ところが 1590 年代になるとペルーでも、メキシコでも、アメリカ在住者による使用例が現われ始める。ペルーではイエズス会士のホセ・デ・アコスタ (1540~1600 年) の例がよく知られている<sup>(9)</sup>が、メキシコでも 1594 年の司教たちの連名書簡で使われている。

…というのは修道士たちがいま司牧している教区を、(先住民の) 言語に精通しているようなこの地生まれのクリオーリョの司祭たち (clérigos criollos y nacidos en la tierra) に与えるとなれば…実際、クリオーリョは言葉ができて当然であるが、スペインからあちらへ渡る司

祭には言葉ができる人はほとんどいない。しかし、クリオーリョは一般論ではあるが、不道德で、気まぐれで、墮落している (*gente viciosa, poco constante y relajada*)。…教区を委ね得ると認めることのできる、信頼に足るあちら生まれの人は、インディアスでの経験と現状から判断すると稀で、数えられるほどしかいない<sup>(10)</sup>。

アメリカ生まれのスペイン人に対して臆することなく「クリオーリョ」と言い切り、それまでと同じく厳しい評価を下している。いや、より厳しいと言う方が適切かもしれない。この変化は、「クリオーリョ」の蔑称性が薄れたためではない。むしろ、後述するように、この語を使用する側にクリオーリョへの嫌悪感・憎悪が増し、抑制しなくなったため、クリオーリョに対する攻撃は次第に激しさを増していくのである。

もう1つ注目すべき点は、16世紀末から17世紀初めにかけて目にする「クリオーリョ」の用例の多くが教会・修道院の分野に限られている点である。アコスタやルイス・デ・ベラスコの用例を除けば、適用範囲は聖職者の世界に限定されてしまう。『ヌエバ・エスパーニャ書簡集』や『ハプスブルク期副王文書集成（メキシコ）』に掲載された副王モンテレイ伯（1595～1603年）の書簡や報告書を見る限り、「クリオーリョ」が出てくるのは1通だけである。それは同副王が退任直後の1604年に認めた教会政策に関する報告書<sup>(11)</sup>で、そこには20回以上も登場する。ところがそれ以外の書簡では、「同王国（ヌエバ・エスパーニャ）の征服者や初期入植者の子孫など当地で生まれた人たち (*los naturales della, hijos y descendientes de los conquistadores y primeros pobladores de aquel reino*)」<sup>(12)</sup>や、それに類した言い方に徹している。一語で済ませず、わざわざ長い表現を使うのは、功績ある征服者への敬意と、その子孫（クリオーリョ）への配慮の表われであると同時に、聖職者以外に適用するのは例外的だったことを示している。

## §1-2 「クリオーリョ」登場の背景

クリオーリョへの敵意が膨らんだのには、次のような状況の変化があったためである。メキシコの教会、とりわけ修道院は1570年頃から大きく変貌を遂げようとしていた。もともとアメリカ植民地の教会組織はヨーロッパのそれとはずいぶん異なっていた<sup>(13)</sup>。スペイン人入植者には在俗司祭 *clero secular* が司牧し、先住民への布教活動は修道司祭 *clero regular* が一手に引き受け、この頃までメキシコでの宣教は、フランシスコ会、ドミニコ会、アウグスティヌス会の3つの托鉢修道会がほぼ独占していた<sup>(14)</sup>。ところが、1570年には異端審問所が正式に設置され、72年にはイエズス会が

メキシコでも活動を開始し、74年には教会保護権基本法 *Ordenanza de Patronazgo* が制定された<sup>(15)</sup>。そして王室による教会の管理強化という新政策の旗振り役として、異端審問所長官のペドロ・モヤ・デ・コントレラス（1530?～92年）<sup>(16)</sup> がメキシコ大司教に任命された。

これらの措置はパトロナト・レアルを強化するためであり、宗教改革に対抗してカトリック教会の立て直しを図ったトリエント公会議（1545～63年）の決議をスペイン王室が率先して受け入れたのも狙いは同じである。例えば、トリエントでは教会組織の強化策の一環として、信者は教区司祭が一元的に担当すると決められた。それはアメリカ大陸では、修道会が全力を注いで改宗させた先住民信者を教区担当の在俗司祭の手に渡すことを意味した。王室は、パトロナト・レアルの圏外にあり、司教の命令に従おうとしない修道会が指導する改宗教区 *doctrina* の先住民信者を、その管理下から切り離そうと考えていた。修道士を修道院に封じ込めておき、教区ともども先住民信者を在俗司祭に任せよう（これを「在俗化 *secularización*」と呼ぶ）としたのである<sup>(17)</sup>。

上記の問題とほぼ並行して起こったのが聖職者のクリオーリョ化である。これは聖職者、とりわけ修道士になろうとするクリオーリョが急増し、スペインから来た修道士<sup>(18)</sup>の数を上回り、会の主導権争いに発展した事態を指す。そもそも16世紀前半のメキシコにいた宣教師はほぼ全員がスペイン人であった<sup>(19)</sup>。本格的な改宗活動が始まって12年後の1536年には、メキシコ在住のフランシスコ会修道士は60名おり、帰国した者が20名、物故者も20名いた<sup>(20)</sup>。その後、ヨーロッパからの修道士補給は決してコンスタントでも十分でもなかったが、メキシコにおける修道会の規模はみるみる拡大していった。17世紀初頭になると、フランシスコ会は6つの管区で構成され、およそ200の修道院を有し、800人以上の修道士を抱えていた。ドミニコ会の3つの管区には90の修道院があり、400人の修道士がいた。アウグスティヌス会は2つの管区の77の修道院に380人を擁していた<sup>(21)</sup>。かなりの数だが、これは布教開始以来の延べ人数ではない。

修道士の出身地を見てみよう。じつはスペインなどヨーロッパから補給される宣教師の数は16世紀後半になると大幅に減り、現地で修道会に入る人が増えていた<sup>(22)</sup>。フランシスコ会の場合、1570年代にはまだ、2～3年に1度の割でほぼ25人ずつ修道士が派遣されていたが、79年8人、84年6人、96年18人と回数も規模も減少の一途をたどった。16世紀の最後の30年間に団体派遣された総計は164名であった<sup>(23)</sup>。それに対し、メキシコ市のフランシスコ会修道院で誓願した修道士の数は1570年代140名、80年代150名、90年代162名で計452名となり、本国から来た修道士のお

よそ3倍にのぼった<sup>(24)</sup>。いわば現地採用の修道士が大幅に増えていたのである。その全員がメキシコで生まれ、育ったクリオーリョというわけではない。むしろ当初は、メキシコに来てから修道院の門を叩き、修行を積む本国生まれのスペイン人が多かった。フランシスコ会では現地で入会した人たちを「管区の子 *hijos de provincia*」と呼び、クリオーリョもそこに含まれていた。

アウグスティヌス会の場合、本国から来た修道士は1533～64年までに177名、70年代には40名、80年代、90年代は1回ずつでそれぞれ3名、12名であった。他方、メキシコ市のアウグスティヌス会修道院で誓願した人は、1537～69年に233名、70～78年に111名、79～93年の史料は欠落しているが、94～99年に87名であった。やはり現地調達された修道士が圧倒的に多くなっている<sup>(25)</sup>。

このように16世紀の後半に修道士の出身地にアンバランスが生じると、少数派のガチュピンが会の要職<sup>(26)</sup>を独占していることに「管区の子」たちは不満をもち始める。3年ごとに開かれる管区総会では「管区の子」集団が数に物を言わせるようになり、1564年にはフランシスコ会管区長に初めて「管区の子」が選ばれた。それが第13代管区長のディエゴ・デ・オラルテ師で、コルテス軍で活躍したコンキスタドールから修道士に転身した経歴の持ち主である。その後も16代、17代、20代、さらに第22代から第32代まで、つまり1592年から1623年まで「管区の子」が連続して管区長になっている<sup>(27)</sup>。

「管区の子」が完全に支配したかに見えるが、事態は複雑な様相を呈していた。「管区の子」集団が分裂し、メキシコ生まれのクリオーリョ集団とメキシコへ来てから入会したスペイン人集団（本稿では後者をペニンスラール *peninsular* と呼び、修道士としてメキシコに来たガチュピンと区別する）とに分かれたのである。副王モンテレイ伯によると、分裂のきっかけは1602年の管区総会での選挙で、メキシコでの経験豊かなクリオーリョではなく、来てから日の浅いペニンスラールが要職に就いたことにあった。62ある役職のうち、ガチュピンが24、ペニンスラールが29で、クリオーリョは9を占めたにすぎなかった<sup>(28)</sup>。このためクリオーリョ集団は善処を求め、1606年のフランシスコ会総会に不満を綴った書簡を送った。

メキシコ市とプエブラ市のフランシスコ会修道院でそれぞれの集団ごとに誓願者の推移を見ると、16世紀最後の30年間にはペニンスラールが400人（73%）で、クリオーリョが150人（27%）だったのに対し、17世紀には表1のようになっている。

表1 メキシコとプエブラ両市のフランシスコ会修道院での入会者

年代	総計	Cri.	Peni.	年代	総計	Cri.	Peni.
1600 - 1609	254	72	182	1650 - 1659	204	163	41
1610 - 1619	252	150	102	1660 - 1669	174	142	32
1620 - 1629	188	114	74	1670 - 1679	330	303	27
1630 - 1639	221	118	103	1680 - 1689	199	174	25
1640 - 1649	249	181	68	1690 - 1699	219	165	54

Cri.=クリオーリョ Peni.=ペニンスラール Morales op.cit. p.106

1610 年前後が分水嶺で、数の上で上回りつつあったクリオーリョ集団の矛先は今やペニンスラール集団に向けられた<sup>(29)</sup>。話し合いの結果、それぞれの集団から交互に管区長を出す二交代制 *alternativa* の導入で妥協し、1611 年にはエルナンド・ドゥラン師がクリオーリョとして初めて管区長に選出された<sup>(30)</sup>。チマルパインもこの出来事を『日記』に綴っている。わずか数行に3度も「クリオーリョ」という言葉を登場させて。

Axcan sábado yc 29 mani metztli henero de 1611 años, yhquac  
capítulo mochiuh nican Mexico S Franco; yehuatl provincial mochiuh yn  
padre fr Hernando Durán Cuitlaxcohuapan ychan *criyoyo*. Quin huel yuhti  
axcan *criyoyo* nican otlacat ypan Nueva España provincial omochiuhca yn  
ompayc ye yzqui xihuitl ahcico achto matlactlomome padreme S  
Franco nican Nueva España, ca çan oc moch huitze Castilla yn  
omochiuhтиненca provinciales yn ipan izquitetl capítulo onhualmochiuhitia;  
auh ca quin axcan ypan in yn omoteneuh capítulo onpeuh ontzintic ynic huel  
provinciales mochihuazque *criyoyos* yn nican tepilhuan Nueva España S  
Franco teopixque.

1611 年1月29日土曜日、メキシコ市のサン・フランシスコ（修道院）で総会が開かれ、クイトラシュコワパン（プエブラ）生まれのクリオーリョ、エルナンド・ドゥラン神父が管区長に選ばれた。ヌエバ・エスパーニャで生まれたクリオーリョが管区長に選ばれるのは、フランシスコ会の十二使徒が最初にヌエバ・エスパーニャに到来して以来初めてのことである。何度か開催された総会で選ばれた管区長はそれまで全員、カスティーリャからやって来た人たちだったからである。この総会以来、フランシスコ会の管区長にはヌエバ・エスパーニャで生まれたクリオーリョも選ばれるようになった<sup>(31)</sup>。



二交代制の導入で問題が解決した訳ではなかった。1612 年、フランシスコ会総長は、二交代制ではなく、クリオーリョ、ペニンスラール、ガチュピンの中から順番に管区長を出す三交代制 *ternativa* を導入するよう指示した。そのため、騒動がすぐに収まることはなかった。

アウグスティヌス会は、ヌエバ・エスパーニャ社会を映す鏡と言われる程、他の会と比べ地元有力者層との繋がりが強く、16 世紀後半から 17 世紀初めにかけて最もクリオーリョ化が進んだ修道会となった<sup>(32)</sup>。この会では早くも 1548 年に「管区の子」の中から管区長が生まれ、1580 年代初めにはクリオーリョの管区長も選ばれた。その後 1602 年まで 6 期のうち 4 回、クリオーリョが管区長に選ばれている<sup>(33)</sup>。そのため、クリオーリョ化に反発するガチュピンたちがメキシコ中西部のミチョアカン地方に集中し、1602 年には新しい管区を立ち上げ、まさに分離独立の様相を呈した。1614 年の管区総会も荒れ模様が見込まれ、監視のため副王が立ち会ったとチマルパインも記している<sup>(34)</sup>。

ドミニコ会では、副王モンテレイ伯が離任する 1603 年 10 月の直前に管区総会が開かれ、クリオーリョのルイス・デ・ソロルサノ師が管区長に選出された。ところが前任者のボオルケス師もクリオーリョであったことから、二交代制の原理に反するとして当初から不満の声が副王の耳にも届いていた<sup>(35)</sup>。

このように「在俗化」と「クリオーリョ化」という 2 つの新たな激流が、17 世紀初頭のメキシコの教会と托鉢修道会を揺さぶっていた。急速に勢力を増すクリオーリョに対し、多勢に無勢のガチュピン集団はクリオーリョ化に歯止めをかけるには、彼らが修道士としての資質を欠くことを訴える書簡を本国に送るしか手立てがなかった。こうしてクリオーリョの圧力が強まるにつれ、ますます激しい言葉で対抗するようになったのである。

## §2. チマルパインの『日記』に見る「クリオーリョ」

### §2-1 用例と時期

ではチマルパインはいつから「クリオーリョ」という語を使用し始めているのであろうか。『日記』以外の彼の著作に使用例はなく、『日記』でもきわめて数が限られている。全ての例を挙げたのが表 2 である。

チマルパインの「クリオーリョ」の使い方を細かく見てみよう。○付き数字は表 2 のそれと対応している。イタリックは筆者による。

表2 チマルパイン『日記』に登場するクリオーリョ

	年	名前	役職など	記事の内容
①	1608	アロンソ・デ・ラ・モタ	司教	ハリスコ司教からプエブラ司教へ
②		フランシスコ・デ・ベラスコ	副王子息	マドリードのコレヒドール、刺殺される
③		カルバハル博士	聴訴官	グアテマラの聴訴官に
④	1609	バルタサル・コバルビラス	司教	オアハカ司教からミチョアカン司教へ*
⑤		フワン・セルバンテス	司教	オアハカ司教に*
⑥	1610	ペドロ・デ・アグルト	司教	任地のセブで客死；クリオーリョ初の司教
⑦	1611	エルナンド・ドウラン	修道士	フランシスコ会管区長（クリオーリョで初）
⑧	1612	(カルバハル博士)	聴訴官	死去
⑨		フェルナンデス・デ・ベラスコ	判事	着任
⑩		L・デ・アルセガ・イバルグエン	副王随員	新任副王の随行員として帰国
⑪	1613	ヘロニモ・デ・カルカモ	司教	スペインから赴任途上、死去
⑫		ディエゴ・デ・コントレラス	司教	サントドミンゴ司教に任命
⑬	1614	(フワン・セルバンテス)	司教	死去*
⑭		J・サパタ・イ・サンドバル	司教	チアパス司教（アウグスティヌス会）
⑮	1615	(ディエゴ・デ・コントレラス)	司教	サントドミンゴ司教として任地へ*
⑯		フワン・デ・サラマンカ	聖歌隊	高齢で死去

( ) は2度目の言及

\*「クリオーリョ」という語は使わず、「メキシコ市生まれ、この町の子」などと表現している。

① --- Don Alonso. de muta. obispo. xalixco. Guadalajara. --- Ynin yehuatzin

obispo. huel nican mexico. tlacat. nican tepiltzin. *crijoyo* mitohua yntech  
quiça y pipiltin conquistadoresme

…ハリスコのグアダラハラ司教（だった）アロンソ・デ・（ラ・）モタ殿…この司教はメキシコ市で生まれ、ここの人たちの子供で、クリオーリョと呼ばれた。高貴な征服者の子孫である<sup>(36)</sup>。

③ --- Auh inic omentin nican ohualtequimacoque yehuatl. yn doctor.

Graujar. oydor. mochiuh yn ompa audiencia. quauhtemallan. ynin  
totepantlahtocauh catca.yn nican mexico audiencia real. ynin huel *nican*

*tlacat. huel nican tepiltzin. mexico. ye quin icel.yancuican criyoyo. oydor.*  
*omochiuh. ye quin oncan yc pehua yn. ynoydortizque criyoyosme çan niman*  
*ipan in yn omoteneuh xihuitl ya quauhtemallan yn omoteneuh oydor.*

…ここで任務を与えられた 2 人目はカルバハル博士で、グアテマラ的高等法院の聴訴官に任ぜられた。彼はメキシコ市的高等法院で役人をしていた。彼はここの生まれで、ここメキシコ市の当地の子で、高等法院の聴訴官になった最初のクリオーリョである。クリオーリョたちが聴訴官に任命されるようになるのはこの人からである。この聴訴官はこの年のうちにグアテマラへ向かった<sup>(37)</sup>。

- ⑤ --- *yn Don Juan de ceruantes. obispo huaxacac. mochiuhtzino. yn o iuh*  
*macoc teoyotica ytlahlocayo. yc niman oncan mohuicac ynic mohuetzito.*  
*huaxacac ynin obispo. nican tlacat mexico nican tepiltzin yntech quiça yn*  
*conquistadoresme*

…フワン・デ・セルバンテス殿はオアハカ司教に任命された。そこを靈的に治めることになり、すぐにオアハカへ向かい、落ち着いた。この司教はここメキシコ市で生まれ、当地の子でコンキスタドールの子孫である<sup>(38)</sup>。

①、②、③、⑥、⑦、⑫、⑭、⑯では「クリオーリョ」だけでなく、「ここメキシコ市で生まれた人 *nican mexico tlacat*」、「当地の子 *nican tepiltzin*」などという表現とセットになっている。また、④、⑤、⑬、⑮では「クリオーリョ」を使わずに「当地の子」とだけ言っている。つまり、17 世紀初頭の段階では「クリオーリョ」という語はまだ十分には定着しておらず、「当地の子」と補足説明をつける必要があるとチマルパインは判断したのである。その傍証が綴りの変化である。①から⑫まで、つまり 1608 年から 1613 年までチマルパインは “criyoyo” と綴っていたのに対し、最後の 2 つの用例⑭と⑯、つまり 1614 年と 1615 年になると “criollo” という、当時の（そして今日も）一般的なスペイン語の綴りに変わっている。まさにこの語が定着化する過渡期にいたと言える。

- ⑭ --- *Don fray Juan çapata y Sandoual Obispo teopixq S. Augustin ompa*  
*ytequitzin motlalia quimopieliz. yn altepetl ciudad chiapa. ynin nican.*  
*mexico chane nican tepiltzin motenehua criollo*

…アウグスティヌス会の修道士フワン・デ・サパタ・イ・サンドバル司教が（メキシコ市のサンアグスティン教会に着いた）。彼はチアパスの町（の司教）を担当することになっていた。彼はここメキシコ市出身の当地の子で、いわゆるクリオーリョであった<sup>(39)</sup>。

もっと以前からではなく、1608 年になって初めてチマルパインが「クリオーリヨ」という語に注目し始めた、とする根拠は何か。最初に取り上げられたクリオーリヨはプエブラ司教になったアロンソ・デ・ラ・モタ・イ・エスコバル（1546?～1625 年）<sup>(40)</sup>で、1608 年にグアダラハラ司教から異動したことが記され、クリオーリヨであると紹介された。ところが、1597 年にグアダラハラ司教に任命された際には一言も触れられていない。同じことはフィリピンのセブ司教ペドロ・デ・アグルトにも言える。取り上げられたのは 1610 年に赴任先で客死した件であるが、16 世紀末に任命されたときには話題にもなっていない。同じく、フワン・デ・セルバンテスも 1594 年から何度も『日記』に登場し、聖堂参事会の幹部職や大司教代理を歴任していたにもかかわらず、クリオーリヨであることが明かされたのは 1609 年、オアハカ司教として赴任する際になってからである。3 人とも最初に要職に任命された時こそ、クリオーリヨとして初の快挙であり、もっと注目されてよいはずである。にもかかわらず 16 世紀末の任命時ではなく、1608 年以降の転進あるいは死去だけが取り上げられている。つまり、チマルパインは 16 世紀末にはあまり意識することのなかったクリオーリヨを、1608 年になって初めて 1 つの社会集団として認識し始めたのである。それはちょうど「史的回顧」を描き始める前年であり、チマルパインも決して無縁ではない教会という世界でクリオーリヨが存在感を示し始めた頃であった。

## §2-2 チマルパインの新しい「クリオーリヨ」

さて、チマルパインの「クリオーリヨ」の使い方から次のような特徴を指摘できよう。

- (1) 死亡に関する記事が 6 件あるが、クリオーリヨに限らず、王侯貴族や著名人の誕生・死去についての記事は彼の他の著作でも数多く見られる。
- (2) 聖俗を問わず、高位に就いているクリオーリヨだけが取り上げられている。王侯貴族や高位の人だけに言及するのは、彼の他の著作にも見られる傾向である。
- (3) 当時は蔑称であった「クリオーリヨ」を使っているが、決してマイナス・イメージを伴っていない。むしろ立身出世を遂げたクリオーリヨばかりである。
- (4) 教会や修道院に関連したクリオーリヨに限定せず、聴訴官や判事など世俗の高官にも用いている。

このようにチマルパインは、それまで主に教会・修道会という狭い世界で使われていた「クリオーリヨ」を世俗の人間にも拡大適用した。それだけでなく、彼はこの語からネガティブな評価を消し去っている。ガチュピンたちが憎悪に近い感情とともに使った「クリオーリヨ」にむしろシンパシーを込めて使ったと言える。聖俗を問わず

身を立て名をあげたクリオーリョばかりを取り上げており、その後もこれらの職に任命されるクリオーリョが続いたと、静かに喜んでいるからである。

とりわけ、クリオーリョのアウグスティヌス会士ディエゴ・デ・コントレラス師には、特別な思いを抱いていた様子がうかがえる。コントレラス師は 1609 年にメキシコ大学聖書学の正教授に選ばれたあと、サントドミンゴ大司教に指名される。13 年の聖別式の際、チマルパインは彼に尊敬と愛情のこもった形容<sup>(41)</sup>を施し、大司教の象徴パリウムを肩に掛ける儀式ではそのスカーフを事細かに描写している。さらに 15 年 5 月、大司教がいよいよ任地へ赴く際には、「メキシコ生まれで、この偉大な都市の子」である彼は国王とローマ教皇によってこの職に選ばれた<sup>(42)</sup>と締め括る。胸を張って同郷の英雄を送り出す様子が目に浮かぶ。

### §3 カスタ<sup>(43)</sup>社会におけるチマルパインの人種観

#### §3-1 メスティソとチマルパイン

チマルパインがクリオーリョにシンパシーを感じていたと言っても、以上の説明では十分に納得できないかもしれない。しかし、ここで思い起こしてほしいのは、チマルパインが暮した 17 世紀のヌエバ・エスパーニャ社会がカスタ社会だったという点である。メキシコでカスタとは多様な混血および有色人種を意味した。まさに人種の坩堝であったメキシコ市でチマルパインは日本人も含め、多くの民族、人種を目にしている。その個々の集団について独自の見方が開陳されている訳ではないが、メスティソや黒人について彼の人種観が垣間見える箇所がある。それらとクリオーリョに対するチマルパインの見方を比較すると、その心理的距離の差が際立つであろう。

1565 年に、メキシコ市の先住民統治官 *gobernador* ナナカシパクツィンが亡くなり、メシコ・テノチティトランの旧領主の家系が途絶えた。その後は、正統家系でない人や外部の者が統治官に就任するようになる。副王から指名される統治官には貴族出身者もいるにはいたが、平民もおれば、メスティソさえいた、とチマルパインは言う。そこからメスティソへの疑惑や不満が続く。まず、いかにも彼らしく出自に拘泥し、メスティソの場合、その父親であるスペイン人は貴族か、平民かが不明だと指摘する。メキシコでの彼らの結婚相手には貴族の娘もおれば、平民の娘もおり、生まれてくるメスティソには私生児として扱われる子もいた。そしてチマルパインが最も心を痛めたのは次のようなメスティソの存在であった。

--- yn cequintin yllihuiz tlaca mestiços mestiças amo techmocuitiznequi  
ynic cequi tezço totlapallo quipia, çan huel moespañolnehnequi, techtolinia

no toca mocahcayahua yn iuh techihua cequntin españoles.

メスティソの中に、先住民の高貴な血を引いていることを隠し、スペイン人として振舞い、一部のスペイン人がするように先住民を蔑み、馬鹿にする者がいる<sup>(44)</sup>。

メスティソへの不信感がにじみ出ているが、メスティソ全体に対して一様に不満を抱いていた訳ではない。引用部分の直前には、「我われの血を引いていることを認め、誇りに思う」メスティソもいると言っている。また、メスティソでメキシコ市の統治官になった 3 人については、それぞれの名を挙げ、出身地や経歴に触れて顕彰し、否定的評価はしていない。あくまでニュートラルである<sup>(45)</sup>。

### §3-2 黒人とチマルパイン

他方、チマルパイン作品で黒人に関する話題は、その多くが反乱の陰謀にまつわるものである。1537 年の騒動<sup>(46)</sup>に始まり、ついで 1609 年<sup>(47)</sup>、そして最もスペースを割いている 1612 年 4 月のもの<sup>(48)</sup>までである。これらの反乱計画はいずれも未遂に終わったが、他の史料でも確認できる実際の出来事であった。最後の事件ではメキシコ市の中央広場で 35 人もの黒人が絞首刑に処されている。

注(43)に挙げた表で見ると、白人と黒人系の混血ムラートの人口はあまり差がなく、むしろ白人の方が多いが、1608 年メキシコ市のある官吏は白人対黒人の人口比は 1 : 10 以上であり、先住民よりも脅威であると述べている<sup>(49)</sup>。この発言はまさにスペイン人の心理状態を物語っている。黒人の暴動や反乱に当初から神経を研ぎ澄ませてきた植民地当局は、黒人の武器携行や夜間外出を禁じ、スペイン人が保有できる黒人奴隷の数を制限するなどして入念な対策をとってきた。黒人の陰謀にしばしば言及するチマルパインもその警戒心を共有していたと言えよう。その一方で、怯え、うろたえ、過剰な警戒態勢を敷くスペイン人の様子を冷ややかな目で見るとチマルパインもいる<sup>(50)</sup>。

なお、陰謀に加わった廉で逮捕・処刑された黒人にはメキシコ生まれのクリオーリョが多かった<sup>(51)</sup>。にもかかわらず、チマルパインはその点には触れていない。処刑後の首謀者の遺体がバラバラにされる様子を淡々と描くチマルパインから、彼らに対する同情や共感といったものは感じ取れない。

## 結び

本稿ではチマルパインの「クリオーリョ」という語の使い方に注目した。数多い彼の著作の中で「クリオーリョ」が出てくるのは『日記』のみであり、それも 1608 年以降に限られる。ちょうど「史的回顧」を書く前年のことである。

「クリオーリョ」という語はもともと黒人奴隷や家畜に使われた差別語で、当初から蔑視を含んでいた。それがアメリカ大陸生まれのスペイン人に適用されるようになるのは、本国で 1570 年代、植民地では 1590 年代からで、しかもかなり攻撃的な内容の文において、蔑みを伴って使われた。いずれも教会に関連した文脈においてであったが、それはその部門でクリオーリョとガチュピンやペニンスラールの対立が激化した事実と関連していた。メキシコの教会や修道会でクリオーリョが急速に数を増やし、組織を乗っ取りかねない勢いがあったため、非クリオーリョはそれまで暗に禁じ手としていた「クリオーリョ」を使い、彼らを攻撃する材料とせざるを得なかったのである。

当時、ヨーロッパでも家督を継ぐことのできない次男以下は、政治や宗教、軍事、商業に活躍の場を求めるのが常であった。植民地では高位の官僚や聖職者は本国から派遣されてきたうえ、禁止されていた製造業部門もあったため、クリオーリョの次男坊らは修道院以外に希望のもてる選択肢がなかったのである。「クリオーリョ」という言葉が主に教会に関わる分野で使われたのも、生きのびる道を求めるクリオーリョが教会や修道会に殺到したからにほかならない。

チマルパインが 1608 年以降に「クリオーリョ」を使うようになったのは、決して偶然ではない。それ以前に何人ものクリオーリョが『日記』で取り上げられていながら、クリオーリョであることが明かされるのは 1608 年以降だからである。それはまさに各修道会でクリオーリョとガチュピンの対立が激しさを増しつつあった時期に当たる。

さて、チマルパインの「クリオーリョ」の使い方は、当時の一般的な使い方とは大きく異なっていた。立身出世を果たしたクリオーリョだけを取り上げ、それまでのネガティブな評価を払拭している。さらに副王に次ぐ高級官僚である聴訴官になったクリオーリョらも取り上げ、世俗界にも適用して使用範囲を広げている。チマルパインがクリオーリョに自分の姿を重ねた、あるいはクリオーリョとしてのアイデンティティ<sup>(52)</sup>を抱いたとまでは言えないが、シンパシーを感じていたことは否定できない。この感情は同じ風土で育った者への共感というだけでなく、「アメリカ生まれのスペイン人は先住民と同じ」とガチュピンたちが下す評価への反論にもなっている。

同じ社会に生きる他のカスタへの眼差しと比較すれば、クリオーリョへのシンパシ

一はよりはっきりする。先住民の血を引くことに敬意を払わないメスティソに対しては怒りをあらわにしているが、両親とも高貴な出自であれば尊敬されて然るべきであるとしている。つまりチマルパインが問題にしているのはむしろ血統で、メスティソに対する評価はアンビバレントあるいはニュートラルである。それに対して、黒人に対しては好意的な評価はしていない。メキシコ生まれの黒人に対する態度も冷ややかである。したがって、チマルパインがクリオーリョに対してシンパシーを抱いていたと言っても、黒人は排除されており、全方位的ではなく、選択的なものであった。

クリオーリョとガチュピンの対立、反目はチマルパインの時代以降、激しさを増し、19世紀初めのメキシコ独立の一因ともなる。17世紀半ば過ぎになると、クリオーリョ愛国心 *patriotismo criollo* と呼ばれる集合意識がメキシコのクリオーリョ知識人の間に芽生え、褐色の肌をもつグアダルーペの聖母信仰を軸にして大衆の間でも育まれていった。チマルパインは先住民であり、時代的にも半世紀近く早いものの、メキシコを郷土として愛するキリスト教徒という土台は同じである。スペイン人クリオーリョに対するシンパシーは人種の壁を少し越えて広がりうる、のちの愛国心の萌芽につながる種子なのかもしれない。



注

- (\*) 拙稿「チマルパインと 1608 年」、『撰大人文学』第 22 号、p.1-p.35、2015 年
- (1) 本稿では、「」付きの「クリオーリョ」は「クリオーリョ」という単語を指し、個人や人間集団を意味する時は「」を付けずにクリオーリョと表記する。1521 年、アステカ王国の都テノチティトランの陥落時、スペイン人女性はおそらく皆無だった。征服者の中にはキューバに妻がいた者もあり、翌 22 年には既婚未婚を含め、多くのスペイン人女性がキューバからメキシコに渡った（ベルナル・ディアス、『メキシコ征服記』三、p.47～）。
- (2) Peter Boyd Bowman, *Léxico Hispanoamericano del siglo XVI*, p.238.もう 1 例は身元不詳の人物。
- (3) Juan López de Velasco, *Geografía y Descripción Universal de las Indias*, p.20.この書は 19 世紀まで未刊のままであった。なお、クリオーリョに関する項目は削除される予定であった。以下、引用史料は、邦訳書名を挙げたもの以外、いずれも拙訳による。なお、必要に応じ、補足説明や言語表記を（ ）内に付した。
- (4) Fr. Gerónimo de Mendieta, carta al padre comisario general fray Francisco de Bustamante, 1562.1.1., *Cartas de religiosos*, p.28.
- (5) Mendieta al rey, 1574.3.20., Mariano Cuevas, *Documentos inéditos del siglo XVI para la Historia de México*, p.299.
- (6) サアグン、『神々とのたたかい I』、p.147.
- (7) Juan Suárez de Peralta, *Tratado del descubrimiento de las Indias* (1589 年) なお、引用文中の「財宝」とは、テノチティトラン入城後、反撃にあったスペイン人が一旦退却する際に堤道や水路で手放し、失ったもので、征服後、その大捜索が行われた。
- (8) Baltasar Dorantes de Carranza, *Sumaria relación de las cosas de la Nueva España*, p.99. 長いが、原文の一部（イタリックは筆者による）を示す。... viendo lo que cada día se iba poblando de españoles la monarquía de las Indias, así de *los engendrados y nacidos en ellas, descendientes de sus conquistadores y pobladores que en sus principios las descubrieron, conquistaron y poblaron, como de los que en el discurso de los años de su descubrimiento y conquista han venido y se han ido naturalizando en ellas, casándose y echando raíces y dilantado sus linajes, familias y descendencias* ...
- (9) 「あるクリオーリョ（新大陸でエスパニャ人の親から生まれたものをあちらではこう呼ぶ）たちは、この果物が、エスパニャのすべての果物をしのぐと言っていた」。ホセ・デ・アコスタ、『新大陸自然文化史』、第 4 書、第 25 章、1590 年。
- (10) Las razones e inconvenientes que los Religiosos de las Ordenes Mendicantes..., *Cartas de religiosos*, p.173.
- (11) Carta del Conde de Monterrey sobre el gobierno eclesiástico, abril, 1604 en *Los virreyes españoles en América durante el gobierno de la Casa de Austria*, México II, p.216-30.
- (12) Información ... sobre el estado en que se encontraba la sucesión de las encomiendas

de indios ..., 17 de abril de 1597, *Epistolario de Nueva España* 13, p.4.

(13) スペイン王室は 1493 年にはインディアスでの独占的布教権（実質的に領有権）を授与される一方、布教費用を負担した。その後、1508 年には教皇ユリウス二世から同地域における教会の保護・監督権（司教などの任命権、教区設定権、十分の一税収入など）を与えられた。これを国王教会保護権 *Patronato Real* という。当時の西欧教会で国王がここまで教会を支配した例は、グラナダ司教区を除いて見られない。

(14) 教皇レオ十世は修道士たちに先住民への布教権を与えたほか、秘蹟授与・教会堂建設・司祭任命など広範な権能を付与した（1521 年）。翌年にはハドリアヌス六世が、先住民布教に関して必要な全権能を修道士に与えた。そのため、アメリカ大陸の教会では修道士の力が強くなり、先住民の扱いを巡って一般のスペイン人入植者や在俗司祭、司教とも対立することがしばしばあった。

(15) 教区や信者についての年次報告義務、修道士と修道院の一覧提出など司教権限を強化して教会に対する王権を強めることを目指した。John Frederick Schwaller, *The Church and Clergy in Sixteenth-Century Mexico*, p.70-109, Francisco Morales, *La Iglesia de los frailes*, p.54-7

(16) モヤ・デ・コントレラスはその後、副王をも兼任し、帰国後はインディアス枢機会議の議長を務めた。彼については、Stafford Poole, *Pedro Moya de Contreras* が詳しい。

(17) 1565 年、85 年にメキシコで開かれた第 2 回、第 3 回地方公会議では、トリエント決議をいかに実行するかが主に話し合われた。また、1568 年に開催された合同審議会 *Junta Magna* では教会の在俗化を促進する政策を取ることが決議された。これについては染田秀藤「16 世紀スペインにおけるインディアス」を参照のこと（特に、p.128-137）。「先住民教区の在俗化」に修道会はこぞって反対し、激しく抵抗したため、在俗化にはほぼ 2 世紀を要することになる。チマルパインもこの問題に関して『日記』に記録しており（1583 年、p.28-9 や 1613 年 11 月、p.352-3）、関心を寄せていたことが分かる。

(18) スペインから来た修道士はガチュピン *gachupín* と呼ばれた。この語はとくに 18 世紀になると、スペインから来たばかりの人を嘲る時に用いられるが、17 世紀初めには差別語ではなかった（Francisco Morales, *Antecedentes sociales de los franciscanos en México. Siglo XVII*, p.79.）。

(19) 征服直後の 1523 年には、カール五世が幼少期を過ごしたベルギーから 3 人のフランシスコ会士が来た。1524 年、最初の団体、いわゆる十二使徒が到着してからはスペイン出身者が圧倒的多数を占める。

(20) モトリニア、『ヌエバ・エスパーニャ布教史』、p.230、p.311.

(21) Antonio Rubial García, *La Iglesia en el México Colonial*, p.173-5. 管区 *provincia* は修道会の運営上の地域区分で、カトリック教会の(大)司教区とは関係がない。メキシコのフランシスコ会の場合、最初はスペインのエストレマドゥラ管区の下に属し、*custodia* と呼ばれたが、1535 年にサントエバンヘリオ管区として独立した。その後、活動範囲を広げるに伴い、ハリスコ、サカテカスなど 6 つの管区でメキシコや中米をカバーした。

- (22) 先住民やメスティソの入会が困難だったことについては、前号 p.7 を参照のこと。在俗化を促進するため、王室は修道士の渡航を制限し始めた。Margarita Menegus, “La iglesia de los indios”, p.108-14.
- (23) Francisco Morales, *op.cit.*, p.98. しかも上記の数はメキシコに着いた人数で、到着後にフィリピンや中米に向かった人も含まれている。
- (24) *id.* p.94.
- (25) Rubial García, *El convento agustino y la sociedad novohispana, 1533-1630*, p.13ss. ガチュピンの数を増やすため、フィリピンに向かう布教団をメキシコに留めようとする動きも見られた。
- (26) 管区長 provincial、彼を補佐する 4 人の宗務委員 definidor、主要な修道院の院長 prior（フランシスコ会では guardián と呼ばれた）など。
- (27) Agustín de Vetancurt, *Menologio franciscano*, p.149-51.
- (28) Morales, *op.cit.* p.99.
- (29) 中でも 1595 年からの 5 期のうち 4 期、管区長職を占めていたビスカヤ出身者集団と激しく対立した。
- (30) ミチョアカン管区ではそれより前に、クリオーリョのディエゴ・ムニョス師が管区長になっている。
- (31) Chimalpáhin, *Diario*, p.224-5. 以下、用法を問題にしているためナワトル語のテキストを、ラファエル・テナ版にもとづき掲載する。なお、テナのスペイン語訳のほか、『日記』はロックハート、シュローダーらによる英訳、『日記』以外は UNAM から出ているスペイン語訳を参考にした拙訳を付した。なお、当時の México は国ではなく、メキシコ市を指した。
- (32) Rubial García, *El convento agustino ...*, p.68-70.
- (33) *ibid.*, p.252-5. フランシスコ会以外では「管区の子」という表現は使っていないが、同じようにメキシコで入会した人は他の会にも多くいたので、本稿では会に関係なく適用する。
- (34) Chimalpáhin, *Diario*, p.368-71
- (35) Carta del Conde de Monterrey, 1604.3., *Los virreyes españoles en América durante el gobierno de la casa de Austria, México II*, p.221.
- (36) Chimalpáhin, *Diario*, p.134-5, 1608.5.2. イタリックは筆者による。以下同じ。
- (37) *loc. cit.*, 1608.5.29.
- (38) *id.*, p.200-1, 1609.5.3.
- (39) *id.*, p.388-9, 1614.10.11.
- (40) 司教区をしばしば巡察し、グアダハラハ司教時代には *Descripción Geográfica de los Reynos de Nueva Galicia* を、プエブラ司教時代には *Memoriales del Obispado de Tlaxcala* を残した。
- (41) 「いと尊き、霊的主であられる導師 yn cenca mahuiztililoni teoyotica tlahtohuani maestro」、Chimalpáhin, *Diario*, p.352-3.
- (42) 同、p.400-1.

(43) カスタはポルトガル語のカーストと同じ語源。「メスティソ」も広義では様々な混血を意味することがあるが、本稿では「スペイン人と先住民の混血」という狭義でのみ使う。なお、16世紀後半と17世紀半ば、ヌエバ・エスパーニャの人口構成は以下のような試算がある。

年	白人(1)	白人(2)	黒人	ムラート	メスティソ	先住民	合計 (人)
1570	6,644	11,067	20,569	2,437	2,435	3,336,860	3,380,012
1646	13,780	168,568	35,089	116,529	109,042	1,269,607	1,712,615

「白人(1)」はスペイン人移民一世や一時滞在者；「白人(2)」はクリオーリョ

Gonzalo Aguirre Beltrán, *La población negra de México*, p.234.

(44) Chimalpáhin, *Séptima Relación*, p.228-9.

(45) フワン・マルティンは、1592年以降、高齢の統治官アントニオ・バレリアーノの補佐をしたほか、7市の統治官を歴任した (*Diario*, p.78 他)。ハルトカン出身のヘロニモ・ロペスは1599年から1608年まで長期にわたり統治を任された (*id.* p.136 他)。3人目はフワン・ペレス・デ・モンテレイ (*id.* p.208 他)。ただし、彼らがメスティソであることを明かすのは、最後の1人を除いて、それぞれのキャリアの後半や死後になってである。

(46) Chimalpáhin, *Séptima Relación*, p.196-7.

(47) Chimalpáhin, *Diario*, p.196-7.

(48) チマルパインは、容疑者の逮捕、裁判、処刑の様子に加え、反乱が成功した暁に黒人たちが築こうとしていた社会の詳細まで記している。Chimalpáhin, *op.cit.*, p.280-301.

(49) Colin A. Palmer, *Slaves of the White God*, p.132.

(50) Chimalpáhin, *Diario*, p.286-7

(51) Palmer, *op.cit.*, p.136

(52) チマルパインはチャルコ地方においてはアマケメカ人、メシーカ人に対してはチャルコ人として、スペイン人に対しては先住民として、異教徒に対してはキリスト教徒としてのアイデンティティーを重層的にもっていたことについては、Ruhnau (2000)や井上(2011)が指摘するとおりである。

## 参考文献

### 一次資料

- Chimalpáhin, Domingo, *Las ocho relaciones y el Memorial de Colhuacan*, paleografía y traducción por Rafael Tena, Consejo Nacional para la Cultura y las Artes (以下、CONACULTA)、México, 2 vols., 1998
- *Diario*, paleografía y traducción por Rafael Tena, CONACULTA, México, 2001
- *Tres crónicas mexicanas Textos recopilados por Domingo Chimalpáhin*, paleografía y traducción por Rafael Tena, CONACULTA, México, 2012
- Chimalpain Cuauhtlehuanitzin, *Octava Relación*, edición y versión castellana de José Rubén Romero Galván, Universidad Nacional Autónoma de México (以下、UNAM), México, 1983
- *Memorial breve acerca de la fundación de la ciudad de Culhuacan*, ed. de Víctor M. Castillo. F., UNAM, México, 1991
- *Primer Amoxtli Libro, 3ª Relación de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Víctor M. Castillo. F., UNAM, México, 1997
- *Primera, Segunda, Cuarta, Quinta y Sexta Relaciones de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Josefina García Quintana, Silvia Lemón, Miguel Pastrana y Víctor M. Castillo F., UNAM, México, 2003
- *Séptima Relaciones de las Différentes Histoires Originales*, ed. de Josefina García Quintana, UNAM, México, 2003
- *Chimalpáhin y la conquista de México [La crónica de Francisco López de Gómara comentada por el historiador nahua]*, ed. Susan Schroeder, David Tavárez Bermúdez, Cristián Roa-de-La-Carrera, UNAM, México, 2012
- Chimalpahin Quauhtlehuanitzin, don Domingo de San Antón Muñón,
- *Annals of His Time*, edited and translated by James Lockhart, Susan Schroeder, and Doris Namala, Stanford University Press, 2006
- *Codex Chimalpahin : Society and Politics in Mexico Tenochtitlan, Tlatelolco, Texcoco, Culhuacan, and Other Nahua Altepetl in Central Mexico*, 2 vols., ed. and trans. By Arthur J. O. Anderson and Susan Schroeder, University of Oklahoma Press, 1997
- Carta del Conde de Monterrey, 1604.3., *Los virreyes españoles en América durante el gobierno de la casa de Austria, México II*, Biblioteca de Autores Españoles CCLXXIV, 1977
- Cartas de religiosos 1539 - 1594*, Slavador Chávez Hayhoe, México, 1941

- Dorantes de Carranza, Baltasar *Sumaria relación de las cosas de la Nueva España*, Biblioteca Porrúa 87, México, 1987
- Epistolario de Nueva España 1505 - 1818, t.XIII, 1597 - 1818*, México, 1940
- López de Velasco, Juan *Geografía y Descripción Universal de las Indias*, Biblioteca de Autores Españoles CCXLVIII, 1971
- Mendieta, Fr. Gerónimo de, carta al padre comisario general fray Francisco de Bustamante, 1562.1.1., *Cartas de religiosos*
- id. al rey, 1574.3.20., Mariano Cuevas, *Documentos inéditos del siglo XVI para la Historia de México*, Biblioteca Porrúa 62, México, 1975
- Mota y Escobar, Fr. Alonso de la, *Descripción Geográfica de los Reynos de Nueva Galicia*, CSIC, Sevilla, 1946
- id. *Memoriales del Obispado de Tlaxcala*, Secretaría de Educación Pública, México, 1987
- Suárez de Peralta, Juan *Tratado del descubrimiento de las Indias*, CONACULTA, México, 1990
- Vetancurt, Agustín de *Menologio franciscano*, Biblioteca Porrúa 45, México, 1971
- アコスタ、ホセ・デ・ 『新大陸自然文化史 上・下』(増田義郎訳) 大航海時代叢書、1966 年
- コロンブス『コロンブス航海誌』(林屋永吉訳) 岩波文庫、1977 年
- サアグン、ベルナルディーノ・デ・『神々とのたたかい I』(篠原愛人・染田秀藤訳)、アンソロジー・新世界の挑戦 岩波書店、1992 年
- ディアス・デル・カステイリョ、ベルナル・ 『メキシコ征服記 一〜三』(小林一宏訳)、大航海時代叢書エクストラ・シリーズ、岩波書店、1986〜87 年
- モトリニア『ヌエバ・エスパーニャ布教史』(小林一宏訳)、大航海時代叢書第 II 期 14、岩波書店、1979 年

## 研究書

- Aguirre Beltrán, Gonzalo *La población negra de México*, México, 1972
- Boyd-Bowman, Peter *Léxico Hispanoamericano del siglo XVI*, London, 1972
- Martínez Baracs, Rodrigo “El *Diario* de Chimalpáhin”, *Estudios de Cultura Náhuatl*, 38, 2007
- Menegus, Margarita “La iglesia de los indios” en M. Menegus, Francisco Morales, Oscar Mazín *La secularización de las doctrinas de indios en la Nueva España : La pugna entre las dos iglesias*, IISUE, UNAM, 2010
- Morales Valerio, Francisco *Antecedentes sociales de los franciscanos en México. Siglo*

- XVII, The Catholic University of America, 1971
- id. “La Iglesia de los frailes” en M. Menegus, Francisco Morales, Oscar Mazín *La secularización de las doctrinas de indios en la Nueva España : La pugna entre las dos iglesias*, IISUE, UNAM, 2010
- Palmer, Colin A. *Slaves of the White God*, Harvard University Press, 1976
- Poole, Stafford *Pedro Moya de Contreras Catholic Reform and Royal Power in New Spain, 1571-1591*, University of California Press, 1987
- Rubial García, Antonio *El convento agustino y la sociedad novohispana (1533 -1630)*, UNAM, 1989 id. *La Iglesia en el México Colonial*, UNAM, 2013
- Ruhnau, Elke “Chalco and the Rest of the World. The Power structure in Prehispanic and Early Colonial Central Mexico and its Representation in Chimalpahin’s. *Diferentes historias originales*”, en Vega Sosa, 2000
- Schroeder, Susan *Chimalpahin & the Kingdoms of Chalco*, University of Arizona Press, 1991
- Schwaller, John Frederick *The Church and Clergy in Sixteenth-Century Mexico*, University of New Mexico Press, 1987
- Vega Sosa, Constanza coord. *Códices y Documentos sobre México, Tercer Simposio Internacional*, Instituto Nacional de Antropología e Historia, 2000
- 井上幸孝 「チマルパインの『日記』」 『神戸市外国語大学 研究科論集』第六号、2003 年
- 同 「クリオーリョという観点から見た先住民記録者アルバ・イシュトリルシヨチトル」 『京都ラテンアメリカ研究所紀要』10 号、京都外国語大学、2010 年
- 同 「植民地時代メキシコの先住民クロニカ（上）（下）」『専修人文論集』88 号、89 号、2011 年
- 染田秀藤 「16 世紀スペインにおけるインディアス」 大内一、染田秀藤、立石博高『もうひとつのスペイン史 中近世の国家と社会』、同朋舎出版、1994 年

### **Summary**

In the 16<sup>th</sup> century “criollo” was a discriminatory word that meant a black slave’s descendent born and brought up in Spain or America. It began to be applied to an American born Spaniard from 1570s on, also with degrading meaning. This new usage represents the sense of crisis in the face of the amazingly increasing criollos in the convents of all mendicant orders and churches in Mexico.

Chimalpahin began to use the term “criollo” in 1608, right before he wrote the “Historical Retrospective” in his “Diario”. And it was not just a coincidence.

Chimalpahin in his Diary treated only criollos who had obtained a high office in the Catholic Church and the colonial government. By doing so he wiped out the negative images of the word “criollo” and expanded its usage to the secular world. We see a kind of sympathy in his attitude toward the Mexican criollos but not toward black ones. His attitude was ambivalent and neutral toward the mestizos. Chimalpahin’s sympathy may have been a seed that would grow into the criollo patriotism in the second half of the 17th century. But also it was criticism against the Spaniards who underestimated the American born people ; criollos as well as natives.